

〔論 文〕

## 殺生行動に関する認識の発達 II

—殺生行動項目の因子分析を通して—

石井正子・三浦香苗

Development of Conceptual Structures for “Life-Destroying Behavior” II

—Through the factor analysis of items for life-destroying behaviors—

Masako ISHII and Kanae MIURA

This paper examines the developmental process of recognition concerning life-destroying behaviors through the analysis of the questionnaire research for the following four groups of different ages: 229 5<sup>th</sup> grade elementary children, 256 7<sup>th</sup> grade junior high school students, 187 university students and 128 elementary and junior high school teachers. The subjects were asked to fill in the questionnaire and choose one from 5-scaled answers, score 5 (can kill) to 1 (can't kill), for 21 different cases of destroying fauna and flora, and the score was calculated by the authors.

The average value in most cases was lowest for the elementary children, and the value for brutal destructions was highest for junior high school students while the value for other cases tended to increase as the age of the subjects increased.

The results of factor analysis for each age-group showed the difference in factor structure between elementary children and the other 3 age-groups. The factors for elementary children were elicited from the kinds of fauna and flora in question, while the factors for the other age-groups were elicited from the kinds of purposes for destroying the fauna and flora in question.

*Key words:* life-destroying behavior (殺生行動), factor analysis (因子分析), brutal destruction of life (嗜虐的殺生), necessary destruction of life for humans (目的ある殺生), conceptual development (認識の発達)

### 【問題と目的】

「いのち」あるいは「死」に対する人の認識については、様々な角度から分析が試みられてきた。代表的なものとして、ジャンケレヴィッチ (1978) の「人称別の死」という考え方がある。一人称の死、すなわち「自らの死」と、二人称の死「愛する者の死」、そして、三人称の死「他者の死」である。二人称の死が、非常に深い喪失感と悲しみをもたらすのに対し、三人称の死は死を悼むという行為ですら、理性的に行われるものであり、時には死者への思いよりも、残された者の悲しみへの共感の方が強い動揺を引き起こす。一人称の死については、年齢、状

況によって複雑に思いが変容する。自らの死は、多くの者にとって強い恐怖を伴った、またときには魅力を伴った思考の対象である。確かに人称別の死という視座は具体的かつ合理的であるが、すべての死をその3つに分類して理解することが可能であるとは考えにくい。

池川 (1999) は、自らが子どもの頃の地域社会とのつながりの中で感じた死を人称別には割り切れない死としてとりあげている。また「二人称の死への開示」として肉親の死に直面しての体験を「何か全宇宙的な神秘の体験に満たされたように思う」と述べ、エリクソンの「統合性」の概念に関連づけて「私とは、私の死後にも生きのびるもののことであ

る、ということばの意味を現実のものとして体験していた」と述べている。

ジャンケレヴィッチのような「我」を中心とした「死」の捉え方はいかにも西欧的であるように思われる。日本において「いのち」あるいは「死」を考えるとときには、「いのちによって生かされているいのち」という考え方がまずは想起され、「いのちの大切さ」を人称別に、「自分のいのち」、「愛する者のいのち」、「他者のいのち」と区別して考えることには抵抗がある。人称別どころか、動物も、植物も生きとし生けるものすべてをかけがえのない「いのち」として扱うことが多い。

しかしながら、現実の人の行動は、ペットの死に大きな精神的ショックを受けながら、何の痛みもなく鶏肉を食べ、家族で食卓を囲みながら、飢餓で死んでいく子どもたちの報道を聞き流すことも可能である。自らの愛情の対象か否か、すなわち人称別の殺生の区別が確かに存在するように思われる。

筆者らはこれまでの研究（三浦ほか 2004, 2005, 2006）において、「いのち」にかかわるさまざまな考え方や、「いのちの大切さ」を教えるための取り組みについて概観してきた。大別すると、「死」を通しての教育（古田 2002, 得丸 2005）、「生き物」との触れあいによる教育（鳩貝ほか 2003, 中川 2004）、「飼育動物のとさつ」をテーマにした教育（鳥山 1985, 村井 2002, 黒田 2003）、「出産」を通じた教育（金森ほか 1996）等に分けられる。それぞれの教育方法についてはその方法や効果について様々な考え方が示されているが、特に「飼育」と「とさつ」を通しての授業については賛否が分かれる。しかし、それらの教育が子どもたちの死生観に与える影響や、学習の過程での子どもたちの認識の変化を客観的に評価したものは少ない。

そこで筆者らは、「殺生行動」への認識構造を調べることを通して、「いのち」あるいは「死」に関わる概念を分析し、発達的变化を捉えるという試みを行ってきた。成果の一つとして、この研究でとりあげる「殺生行動尺度」に関しては、比較的信頼性の高い4つの因子が抽出されている。すなわち、「嗜虐的殺生」、「目的のある殺生」、「快適性維持の

ための殺生」、「魚貝の殺生」である。そして、これらの殺生行動ができるかどうかという傾向について、子ども時代のさまざまな生活体験がかかわっているという結果も得ている。

今回は年齢によって殺生行動に関する認識にどのような変化がみられるかを明らかにするため、新たに小学生と中学生に質問紙調査を行い、成人（大学生、教員）の結果との比較分析を試みる。それによって殺生行動に対する認識構造が、小学生・中学生そして成人の間でどのような発達的变化をとげるのかを検討する。

この研究では、これまでの研究（三浦ほか 2004, 2006）の中で作成を試みた「生活体験」、「価値観」、「殺生行動」の3つの尺度のうち、「殺生行動尺度」の質問項目を用い、各質問項目の下位得点と、因子構造の比較を行う。

## 【方 法】

1. 調査対象: 公立小学校3校5年生 229名, 公立中学校3校1年生 256名, 教員養成系国立大学生 187名, 公立小・中学校教員 128名 合計 800名

2. 調査時期: 小・中学生は 2005年3月, 大学生は 2004年1月, 教員は 2004年8月

## 3. 調査内容

### I. 小・中学生

A4判縦 4枚の調査用紙に、下記の内容を記した。

質問項目の提示順序は 1.「殺生行動に対する賛否とその理由」, 2.「生活体験」, 3.「殺生行動」, 4.「価値観」に関する質問項目の順番である。

#### 1) フェイスシート

調査目的の記載の後、学校名、学年、性別の記載を求めた。

#### 2) 生活体験、殺生行動、価値観に関する質問

これまでの成人を対象とした研究で使用した質問と同内容の質問項目を使用し、漢字には読み仮名をふった。

表1 殺生行動尺度 4群間の比較

質 問 項 目	小学生		中学生		大学生		教 員		有 意 差 ( $<$ は、 $P<.05$ で あることを示す)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1. 理科の勉強のために、フナをばらばらにして調べる	2.02	1.29	2.98	1.53	4.11	1.29	4.19	1.11	小<中<大・教
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	1.08	0.41	1.25	0.77	1.15	0.39	1.15	0.53	小<中
3. 飼っていたにわとりの首を、食べるために絞めて殺す	1.17	0.59	1.44	0.96	1.95	1.31	1.73	1.23	小<中<大・教
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす	1.88	1.07	2.20	1.30	2.57	1.38	2.94	1.42	小<中<大・教
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	1.52	1.00	2.02	1.41	1.83	1.31	1.59	1.14	小<中, 教<中
6. 突然に道に出てきたヘビを棒でたたいて殺す	1.94	1.24	2.36	1.45	2.23	1.42	1.94	1.33	小<中, 教<中
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	2.75	1.56	3.17	1.55	3.69	1.49	3.49	1.47	小<中<大・教
8. 食べるために、つってきた魚をさばく	2.46	1.45	3.18	1.52	4.18	1.17	4.16	1.15	小<中<大・教
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	3.32	1.39	2.55	1.37	3.32	1.31	3.60	1.28	中<小・中・大
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	1.37	0.85	1.91	1.37	1.85	1.25	1.51	1.01	小・教<中・大
11. 面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す	1.14	0.52	1.44	0.96	1.31	0.73	1.21	0.68	小<中, 教<中
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	3.17	1.59	3.30	1.60	3.59	1.62	3.20	1.56	小<大
13. 部屋にいけるために花壇の花を切る	2.93	1.54	3.46	1.47	4.54	0.85	4.66	0.72	小<中<大・教
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	1.54	0.97	1.94	1.27	2.03	1.33	2.07	1.36	小<中・大・教
15. 理科の勉強で、犬の解剖をする	1.14	0.56	1.43	0.98	1.69	1.32	1.42	0.90	小<中<大
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	1.90	1.11	2.26	1.33	2.26	1.38	2.30	1.23	小<中・大・教
17. 生きている貝でみそ汁を作る	3.00	1.52	3.40	1.53	4.44	1.10	4.76	0.71	小<中<大・教
18. ハエをはえたたきで潰す	3.91	1.44	3.97	1.40	4.35	1.24	4.67	0.93	小・中<大・教
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	1.88	1.23	1.97	1.31	2.06	1.35	2.27	1.47	無
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	1.38	0.84	1.79	1.24	1.52	0.96	1.52	1.00	小<中, 大<中
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す	1.21	0.63	1.44	0.92	1.37	0.78	1.39	0.80	小<中

① 「殺生行動」に関する質問紙（今回の分析で使用）

具体的な殺生行動ができるかどうかを見るために、「あなたは、以下のことができますか。あてはまると思うところに○をつけてください。ここに書かれた動物や植物はすべて生きているものです。そういう事をするのが、良いか悪いかには関係なく、あなたができると思うかどうかだけを考えて答えて下さい」として、三浦ほか（2004, 2006）で成人に使用した21項目について回答を求めた。具体的項目の内容と提示順序は、表1（小学生に実施した質問項目・ルビ略）に示す。回答は、「できる、たぶんでき

る、できるかどうかかわからない、たぶんできない、できない」の5段階評定で求めた。

② 「生活体験」「価値観」に関する質問項目

三浦ほか（2006）の研究で使用した尺度を基に、言い回しをわかりやすい表現にし、漢字に読み仮名をつけ、それぞれの年齢では回答が困難と思われるいくつかの項目を削除し、代替の質問を挿入して使用した。回答は、成人同様5段階評定で求めた。教師及び大学生に使用した質問紙の詳しい構成内容については、三浦ほか（2006）を参照。この部分に関する分析はここでは行わない。

### 3) 殺生行動に対する賛否とその理由

具体的殺生行動4場面について、賛否を、(賛成・やや賛成・どちらでもない・やや反対・反対)の5段階評定で求めた。また、その理由についてそう考えた理由を自由記述で求めた。この部分に関する分析はここでは行わない。

## II. 大学生, 教員

大学生と教員については、三浦ほか(2004, 2006)、で使用した質問紙の「殺生行動」項目の回答を今回の分析にも使用した。質問項目は小・中学生に使用したものと同様の内容である。

## 【結果と考察】

### 分析 I 殺生行動質問項目下位得点の比較

選択肢調査の最初に記載した殺生行動に関する項目の「できる」を5, ~「できない」を1としてコード化した。小学生, 中学生, 大学生, 教員の項目別の平均値と標準偏差を表1に示す。

#### 1) 小学生

平均値は「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」の1.08から「ハエをはえたたきで潰す」の3.91まで分布した。回答の分布を見ると、「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」(平均1.08 SD 0.41), 「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」(平均1.14 SD 0.52), 「理科の勉強で、犬の解剖をする」(平均1.14 SD 0.56)では「できない」という回答が90%を超えている。また、「飼っていたにわたりの首を、食べるために絞めて殺す」(平均1.17 SD 0.59)では88.6%, 「近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す」(平均1.21 SD 0.63)では86.9%が「できない」と回答している。

#### 2) 中学生

平均値は「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」の1.25から「ハエをはえたたきで潰す」の3.97まで分布した。回答の分布が「できない」に偏る項目は小学生と同じく「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」(平均1.25 SD 0.77)で、86.7%が「できない」と回答している。その他に「できない」の割合が80%以上の項

目は無く、75%以上の項目は「飼っていたにわたりの首を、食べるために絞めて殺す」「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」「理科の授業で、犬の解剖をする」「近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す」であった。

#### 3) 大学生

平均値は「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」の1.15から「部屋にいけるために花壇の花を切る」の4.54まで分布した。回答の分布が「できない」に偏る項目は「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」(平均1.15 SD 0.39)で86.1パーセントが「できない」と回答している。「できない」の割合が75%以上の項目は「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」「近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す」であった。

#### 4) 教員

平均値は「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」の1.15から「生きている貝でみそ汁を作る」の4.76まで分布した。回答の分布が「できない」に偏る項目は「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」(平均1.15 SD 0.53)で89.8パーセントが「できない」と回答している。「できない」の割合が75%以上の項目は「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」「生物学の勉強で、犬の解剖をする」「近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す」であった。

#### 5) 4群間の比較

各質問項目の4群間の平均点を比較すると、平均点の変化の傾向について4つのタイプに分かれる。

1つは小学生<中学生<大学生・教員と年齢があがるにつれて平均値が上がる、すなわち殺生「できる」とする傾向が強くなる項目で、「理科の勉強のために、フナを身体をばらばらにして調べる」「飼っていたにわたりの首を、食べるために絞めて殺す」「雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす」「食べるために、つってきた魚をさばく」等の質問項目でこの傾向がみられた。

2つめは、中学生の平均値が他の群に比べて高くなっている項目で「コオログの足をもいで歩けなくする」、「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」、「面白いので、カタツムリを踏みつぶす」等でこの傾向が有意である。

3つめは、大学生が他の群に比べて高くなっている項目で、「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す」と「理科の勉強で、犬の解剖をする」がこのタイプである。

そして4つめは、中学生が他の群に比べて平均が低いというものであり、「風通しをよくするために、木の枝を切る」という質問項目のみがこれにあてはまる。

#### 6) 発達的变化の検討

小学生はほとんどの項目で他の群に比べ平均値が低く、殺生行動に対する抵抗が強い。理由としては、「生き物を殺してはいけない」という教示をそのまま内面化する年齢であること、実行能力として不可能な行為も多いこと（例、つってきた魚をさばく、ニワトリの首を絞める等）が考えられる。ただし、現実には、虫を使った遊びを行ったり、生き物を飼育しては結果的に殺してしまうという行為を最も多く繰り返している年齢であると思われ、自分たちの現実の行為とは乖離した判断ともとらえられる。

中学生の平均値もどちらかといえば「できない」に偏る項目が多いが、小学生と比較するとほとんどの項目で平均値が上昇しており、殺生行動に対する抵抗は減少する。特に、中学生が他の群に比較して高い平均値を示す項目は「コオログの足をもいで歩けなくする」、「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」等のかなり残虐な、あるいは嗜虐的と想定された項目が多い。このことについて、思春期の不安定さがもたらす残虐性と捉えることも可能だが、他方で、これまで遊びの中で行ってきた殺生行動を客観的にとらえ、「面白いから殺すこともある」という現実に即した認識ができるようになった結果と考えることもできる。「風通しを良くするために、木の枝を切る」が唯一小学生に比較して低かったことも、道徳性や殺生の目的とは別に遂行可能性を客観的にとらえた結果であろう。

大学生と教員では有意差のある項目は少なく、中学生が最も高い数値を示した質問2, 5, 6, 10, 11, 20, 21を除く項目で、小・中学生よりも高い数値を示した。大学生と教員の間に有意差のあった項目は、「飛んできたセミを火の中に投げ入れる」のみであったが、中学生が最も高い数値を示した項目、すなわち残虐、または嗜虐的と捉えられる項目について、教員では小学生について低い値となっている場合が多い。小学生においては、自分たちが行っている行為とは別に学習された道徳概念による判断をおこなっているが（「殺してはいけない」と判断しながら遊びの中で多くの殺生を実行している）、教員においては同じような「殺してはいけない」という判断が、おそらくは主体的判断として行われ、現実に即したもの（実際に殺すことはしない）になっていると考えられる。

#### 分析Ⅱ 殺生行動質問項目因子分析の結果

今回新たに、小学生・中学生・教員を対象とした調査結果の因子分析を行うにあたって、分布が偏り、平均値が低い項目も含めて全項目を入れて実施した。これは、小学生、中学生、大学生、教員、の4群について同じ項目の分析を行い、因子構造の比較を行うという目的のためである。

小学生、中学生、大学生、教員、各群のデータについて殺生行動項目21項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。

##### 1) 小学生

固有値1以上の因子解は5因子解で全体の64%を説明している。当該因子に最も高い因子負荷量を示す、負荷量.35以上の項目を基準にして項目を選択した。（表2）

第1因子は「面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」、「ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」、等の7項目からなり、「身近な生き物の殺生」と命名した。第2因子は、「部屋にいたために花壇の花を切る」、「風通しを良くするために、木の枝を切る」、「生きている貝でみそ汁を作る」等の4項目からなり、「殺生意識が希薄な殺生」とした。第3因子は「理科の勉強のために、フ

ナの身体をばらばらにして調べる」,「食べるために、つってきた魚をさばく」等の3項目からなり「水辺の生き物の殺生」とした。第4因子は「ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める」「突然に道に出てきたヘビを棒で叩いて殺す」,等の3項目からなり「野生動物の殺生」とした。そして、第5因子は「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す」,「ハエをはえたたきで潰す」等の4項目からなり「快適性維持のための殺生」と命名した。

## 2) 中学生

固有値1以上の因子解は4因子解で全体の60%を説明している。当該因子に最も高い因子負荷量を示す,負荷量.40以上の項目を基準にして項目を選択したが,解釈が困難であったため,複数の因子に高い負荷量を示した項目(「11. 面白いのでカブトムシのお腹にナイフを突き刺す」)を除外して再分析を行い,負荷量.40以上を基準にして項目を選択し,解釈可能な4因子解を採用した。4因子解で全体の51%を説明している。(表3)

第1因子は「ひっこしで飼えなくなったので,ペットの猫を殺す」,「近所から鳴き声がうるさいと言われたので,飼っていたオンドリを殺す」,等の4項目からなり「目的ある殺生」と命名した。第2因子は,「食べるために,つってきた魚をさばく」,「部屋にいけるために花壇の花を切る」等の4項目からなり「殺生意識が希薄な殺生」とした。第3因子は,「飛んできたセミを火の中に投げ入れる」「コオロギの足をもいで歩けなくする」等の5項目からなり「嗜虐的殺生」とした。第4因子は「カラスの数が増えないようにヒナのいる巣を壊す」,「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す」,等の4項目からなり「快適性維持のための殺生」と命名した。

## 3) 大学生

固有値1以上の因子解は6因子解で全体の65%を説明している。6因子解では説明が困難であったので,前回の分析結果(三浦ほか 2006)を参考に再分析を行い,負荷量.40以上の項目を基準にして項目を選択し,説明可能な4因子解を採用した。4因子解で全体の56%を説明している。(表4)

第1因子は「面白いので,カブトムシの腹にナイフを突き刺す」「飛んできたセミを火の中に投げ入れる」,等の5項目からなり「嗜虐的殺生」と命名した。第2因子は「飼っていた鶏の首を,食べるために絞めて殺す」,「生物学の授業で,犬の解剖をする」等の5項目からなり「目的ある殺生」とした。第3因子は「食べるために,つってきた魚をさばく」,「理科の実験のために,フナを解剖する」等の3項目からなり「魚貝の殺生」とした。第4因子は,「風通しをよくするために,木の枝を切る」,「雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす」等の5因子からなり「快適性維持のための殺生」と命名した。

## 4) 教員

固有値1以上の因子解は5因子解で全体の60%を説明している。5因子解では説明が困難であったので,大学生と同様に再分析を行い,負荷量.40以上の項目を基準にして項目を選択し,説明可能な4因子解を採用した。4因子解では全体の55%を説明している。(表5)

第1因子は「面白いので,カブトムシのお腹にナイフを突き刺す」,「飛んできたセミを火の中に投げ入れる」,「生物学の授業で,犬の解剖をする」等の6項目からなり「残酷な殺生」と命名した。第2因子は,「生きている貝でみそ汁を作る」,「部屋にいけるために花壇の花を切る」等の4項目からなり「殺生意識希薄な殺生」とした。第3因子は「風通しをよくするために,木の枝を切る」,「カラスの数が増えないように雛のいる巣を壊す」等の4項目からなり「快適性維持のための殺生」とした。第4因子は「飼っていた鶏の首を,食べるために絞めて殺す」,「ひっこしで飼えなくなったので,ペットの猫を殺す」等の3項目からなり「目的ある殺生」と命名した。

## 5) 因子分析結果の比較

各年齢群の因子分析の結果を比較すると,小学生では身近な愛着のある生き物か,野生の生き物か,水辺の生き物かというように,対象の種類によって因子が分かれる傾向があり,中学生以上では,「嗜虐的か」,「何らかの目的のためか」というように殺生の目的によって因子が分かれる傾向がみられる。

表2 小学生因子分析の結果

質 問 項 目	因 子				
	I	II	III	IV	V
11. 面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す	.91	.06	-.06	-.01	-.03
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.74	-.01	-.04	-.02	-.04
15. 理科の勉強で、犬の解剖をする	.69	-.06	.27	-.29	-.01
3. 飼っていたにわとりの首を、食べるために絞めて殺す	.69	.03	.05	.12	-.04
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す	.46	-.03	-.13	.25	.07
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.46	.09	.14	.21	-.02
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.35	-.05	.25	.19	.06
13. 部屋にいけるために花壇の花を切る	.07	.87	-.10	-.15	-.01
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	.06	.81	-.05	-.03	-.04
17. 生きている貝でみそ汁を作る	-.05	.46	.13	.04	-.03
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	-.15	.36	.31	.27	.05
1. 理科の勉強のために、フナを身体をばらばらにして調べる	.06	-.10	.83	.01	-.10
8. 食べるために、つってきた魚をさばく	.02	.21	.61	-.09	-.02
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.31	-.10	.44	.03	.15
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.01	-.11	.04	.90	-.09
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	.39	.08	-.18	.57	-.01
6. 突然に道に出てきたヘビを棒でたたいて殺す	-.07	.02	.41	.49	-.01
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	-.03	-.07	-.09	-.11	.91
18. ハエをはえたたきで潰す	-.20	.23	.16	.02	.50
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす	.29	.05	.03	-.10	.46
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	.08	-.01	-.13	.31	.45

表3 中学生因子分析の結果

質 問 項 目	因 子			
	I	II	III	IV
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.83	-.05	.20	-.13
3. 飼っていたにわとりの首を、食べるために絞めて殺す	.79	.10	-.10	.06
15. 理科の授業で、犬の解剖をする	.69	.11	-.04	-.01
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す	.67	-.17	.24	.10
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.33	.16	.30	.08
8. 食べるために、つってきた魚をさばく	.13	.66	.05	-.09
1. 理科の実験のために、フナを解剖する	.25	.59	.00	-.11
17. 生きている貝でみそ汁を作る	-.04	.59	.00	.08
13. 部屋にいけるために花壇の花を切る	-.04	.50	-.01	.13
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	.02	.25	.12	.14
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	.11	-.04	.73	.04
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.23	-.09	.66	-.01
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	-.18	.36	.58	-.10
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.11	.20	.52	-.02
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.13	-.12	.40	.38
6. 突然に道に出てきたヘビを棒でたたいて殺す	.03	.11	.38	.26
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	.26	-.08	-.05	.73
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	-.24	.16	.25	.47
18. ハエをはえたたきで潰す	-.24	.31	.17	.43

表4 大学生因子分析の結果

質 問 項 目	因 子			
	I	II	III	IV
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	.90	.06	-.06	-.04
11. 面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す	.86	-.08	-.12	-.09
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.71	.04	.05	.00
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.64	-.11	.10	-.09
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.44	.29	.08	.02
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.20	.13	-.11	.02
3. 飼っていたにわとりの首を、食べるために絞めて殺す	-.08	.79	.16	-.08
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す	-.01	.66	-.05	-.02
15. 生物学の授業で、犬の解剖をする	-.06	.65	.13	-.21
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.03	.59	.14	.08
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	.09	.52	-.19	.35
6. 突然に道に出てきたヘビを棒でたたいて殺す	.24	.38	.07	.09
8. 食べるために、つってきた魚をさばく	.00	.07	.84	.02
1. 理科の実験のために、フナを解剖する	-.09	.15	.83	-.10
17. 生きている貝でみそ汁を作る	.00	.01	.51	.14
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	-.14	.02	-.10	.74
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	.03	-.17	.13	.62
13. 部屋にいけるために花壇の花を切る	-.10	-.09	.16	.53
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす	-.05	.24	-.21	.52
18. ハエをはえたたきで潰す	.02	-.09	.28	.45
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	.23	-.15	.34	.39

表5 教員因子分析の結果

質 問 項 目	因 子			
	I	II	III	IV
11. 面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す	.96	-.02	-.20	-.02
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	.87	-.05	-.02	-.09
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.78	.01	-.01	.09
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.71	-.07	.07	.04
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.56	.05	.17	.06
15. 生物学の授業で、犬の解剖をする	.50	.13	-.22	.14
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.35	.09	.31	.08
6. 突然に道に出てきた蛇を棒でたたいて殺す	.32	.12	.21	.05
17. 生きている貝でみそ汁を作る	-.01	.72	-.19	.04
13. 部屋にいけるために花壇の花を切る	.01	.61	.10	-.09
8. 食べるために、つってきた魚をさばく	.00	.53	.08	.08
1. 理科の実験のために、フナを解剖する	.01	.41	.16	.09
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	.26	.32	.15	-.10
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	-.07	-.14	.83	-.11
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	-.12	.05	.65	.23
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす	-.16	.25	.41	.07
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	.29	.15	.40	-.20
18. ハエをはえたたきで潰す	-.02	.19	.34	-.07
3. 飼っていたにわとりの首を、食べるために絞めて殺す	-.05	.30	-.17	.69
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので 飼っていたオンドリを殺す	.26	-.15	.08	.60
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.21	-.20	.07	.55



表6 全体因子分析の結果

質 問 項 目	因 子			
	I	II	III	IV
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	.84	.00	-.04	.01
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	.73	.01	.05	-.02
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	.65	.09	-.02	-.02
11. 面白いので、カブトムシのお腹にナイフを突き刺す	.62	.31	-.09	-.11
6. 突然に道に出てきたヘビを棒でたたいて殺す	.38	.08	.03	.24
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	.38	.16	-.02	.25
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	.37	-.20	.33	.25
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	.32	.28	.16	.09
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので、飼っていたオンドリを殺す	.10	.70	-.12	.06
3. 飼っていたにわとりの首を食べるために絞めて殺す	-.04	.64	.26	-.04
2. ひっこしで飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	.17	.63	-.10	-.06
15. 理科の勉強で、犬の解剖をする	.03	.57	.20	-.15
1. 理科の勉強のために、フナを身体をばらばらにして調べる	.02	.16	.78	-.14
8. 食べるために、つってきた魚をさばく	.07	.04	.77	-.04
17. 生きている貝でみそ汁を作る	-.08	-.02	.63	.15
13. 部屋にいけるために花壇の花を切る	-.15	-.02	.50	.34
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	.21	-.18	-.05	.58
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	-.02	.39	-.15	.58
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	-.07	-.01	.05	.55
18. ハエをはえたたきで潰す	.07	-.18	.21	.54
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣をこわす	-.17	.32	.09	.48

表7 殺生行動尺度の因子別平均値と $\alpha$ 係数 ( )内は標準偏差

因 子 名		全 体	小学生	中学生	大学生	教 員	$\alpha$ 係数	構成する質問項目
I	嗜虐的殺生	1.95 (0.88)	1.71 (0.76)	2.09 (0.97)	2.08 (0.87)	1.93 (0.81)	.84	10, 5, 20, 11, 6, 19, 7
II	目的ある殺生	1.36 (0.66)	1.15 (0.42)	1.39 (0.77)	1.54 (0.69)	1.42 (0.63)	.75	21, 3, 2, 15
III	殺生意識希薄な殺生	3.51 (1.22)	2.60 (1.02)	3.25 (1.11)	4.32 (0.84)	4.44 (0.67)	.81	1, 8, 17, 13
IV	快適性維持のための殺生	3.02 (0.96)	2.83 (0.93)	2.86 (0.98)	3.22 (0.94)	3.34 (0.85)	.72	12, 16, 9, 18, 4

## 分析 III 殺生行動下位尺度の作成と年齢群間の比較

## 1) 全体の因子分析結果

被検者（小学生、中学生、大学生、教員）全体のデータを合わせて、主因子法 Promax 回転による因子分析を行った。固有値1以上の因子解は4因子解で全体の55%を説明した。

当該因子に最も高い因子負荷量を示す、負荷量.35以上の項目を基準にして因子尺度を決定した。第1因子は「飛んできたセミを火の中に投げ入れる」、

「コオロギの足をもいで歩けなくする」等の7項目からなり「嗜虐的殺生」と命名した。第2因子は「飼っていた鶏の首を、食べるために絞めて殺す」、  
「理科の勉強で、犬の解剖をする」等の4項目からなり「目的ある殺生」とした。第3因子は「理科の勉強のために、フナを身体をばらばらにして調べる」、  
「部屋にいけるために花壇の花を切る」等の3項目からなり「殺生意識希薄な殺生」とした。第4因子は、「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す」、「カラスの数がふえないように雛のいる巣を

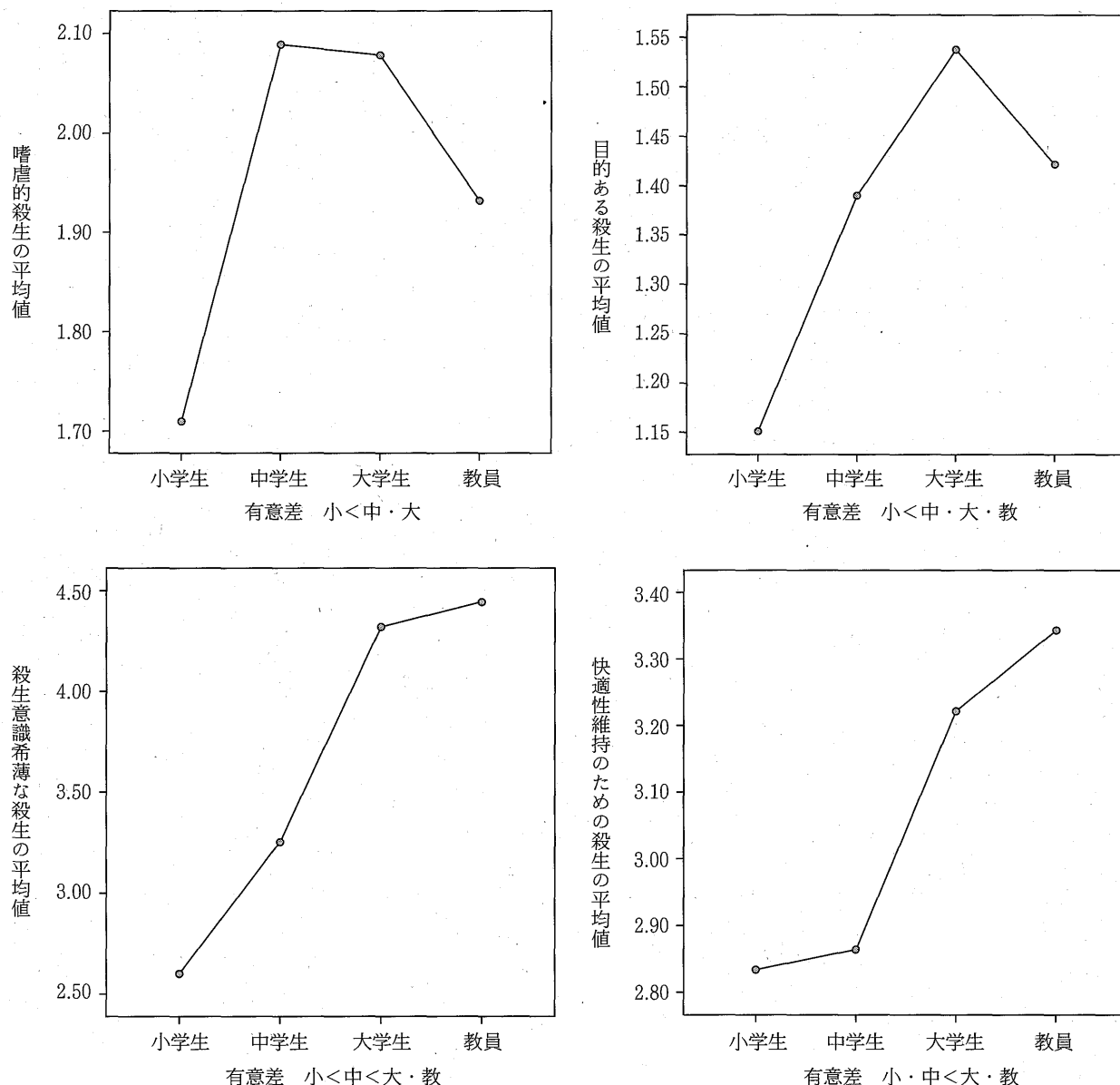


図1 各因子の年齢群間の平均値の変化 (<は、 $P<.05$ であることを示す)

壊す」等の5項目からなり「快適性維持のための殺生」と命名した。(表6参照)

## 2) 尺度信頼性の検討

各因子尺度の信頼性係数(表7参照)は第1因子「嗜虐のための殺生」.84, 第2因子「目的のある殺生」.75, 第3因子「殺生意識希薄な殺生」.81, 第4因子「快適性維持のための殺生」.72となっており, 妥当な数値が得られた。

## 3) 下位因子尺度の検討

表7に因子尺度ごとの年齢別平均値, 図1に平均値の推移を示す。「嗜虐的殺生」は小学生の平均が1.71で中学生の2.09, 大学生の2.08に比べ, 有意

に低い。教員は1.93で小学生について低い値であり, 平均値の変化は中学生を頂点とする山型を描く。ただし, 中学生と大学生の間に有意な差は無い。分析1の考察にも述べたように, 当初から「嗜虐的な殺生」と想定していた質問項目においては, 中学生の数値が最も高い傾向が顕著であるが, この因子に含まれる質問項目の中に大学生の平均値の方が高い2つの項目「ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める」と, 「突然に道に出てきたヘビを棒でたたいて殺す」が含まれたために, 平均値が相殺され, 中学生と大学生の間に有意差はなかった。

「目的ある殺生」は小学生の平均が1.15で最も低

く、中学生 1.39、大学生 1.54 と年齢が上がるにつれて上昇し、教員で 1.42 と若干減少するが、大学生との間に有意な差はない。平均値の変化はほぼ右肩上がりである。漠然とした「殺生はいけない」あるいは「かわいそう」という意識から、「必要な殺生もある」という意識への発達的变化の結果と考えられる。

「殺生意識希薄な殺生」は中学生、大学生、教員において4因子中最も高い平均値を示している。小学生 2.60、中学生 3.25、大学生 4.32、教員 4.44 で、これも年齢が上がるに連れて上昇する。大学生と教員の間に有意な差はない。この因子に含まれる質問項目の平均値はすべての年齢群、すべての質問項目で平均が 2.02 をこえており、最も殺生行動に抵抗が少ない因子と考えられる。

「快適性維持のための殺生」は小学生で 2.83 と4尺度中最も高く、唯一中学生との間に有意差がない。大学生と教員の間にも有意な差はなく、小学生・中学生と大学生・教員の間にも有意差がある。含まれる質問項目の平均値は「ハエをはえたたきで潰す」、「部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたいて殺す」において特に高く、すべての年齢群で 3.0 を超える数値となっている。虫の中でも「ハエ」のように不快害虫とされるものや「クモ」の殺生は、小学生においてさえ、花壇の花を切ることよりもたやすいと認識されている。

## 【まとめと討論】

本研究では小学5年生、中学1年生、大学生、教員を対象に行った殺生行動に関わる意識を明らかにするための質問紙調査の結果を分析し、発達的变化を比較検討した。

1) 殺生行動を「できる」とする割合は小学生では他年齢に比べて低い。また、小学生においては殺生行動の対象となる生き物の種類によって因子が分かれる傾向があり、中学生以上では、殺生の目的によって因子が分かれる傾向がみられる。

小学生にとって第1の因子に分類された犬、猫、ニワトリ、カブトムシといった生き物はおそらく身近な愛情の対象となるものであろう。ジャンケレヴ

ィッチが述べる「二人称の死」とまではいかないにしても、その死はかなり直接的な痛みを伴う。したがって、特に「飼育」や「とさつ」を学校教育に取り入れて行くには、学年や、対象となる動物と児童との関わりに慎重な配慮が必要なのではないかと思われる。

ピアジェ (Piaget, J. 1968) は子どもの認知能力の発達段階として、10歳以降に具体的操作から形式的操作への転換が生じることを明らかにしている。ここでの分析結果において、小学生の殺生概念が「対象の種類」という具体的な因子によって分類され、中学生以降では、「殺生の目的」という抽象的な因子によって分類されるという結果は、ピアジェが述べる「具体的操作」から「形式的操作」への転換に対応して考えることが可能かもしれない。

2) 殺生行動は4つの因子に分かれ、因子によって発達的变化の様相は異なる。

ここで得られた4つの因子はこれまでの研究(三浦ほか 2004, 2006) で得られたものとほぼ共通している。各因子尺度ごとに年齢群間の比較を行った結果、次のような点が明らかになった。

①「嗜虐のための殺生」では中学生を頂点とする山型となる。特に中学生の平均値の高さと、大学生と教員との減少が顕著であり大学生と教員の間で有意差がみられた唯一の因子である。

②「目的のある殺生」は年齢と共に平均値が上昇し大学生でピークを迎える。

③「殺生意識希薄な殺生」、「快適性維持のための殺生」は小・中学生の平均値と大学生・教員の平均値の間の差が大きい。

嗜虐的な項目において中学生の平均値が高いことについてはいくつかの解釈が可能である。思春期特有の心理的不安定がもたらすものとも考えることもできるし、好奇心の表れや、実験的興味と捉えることもできる。あるいは、大人からの他律的道德観に基づく判断による回答が、客観的事実に基づくものに変化したとも考えることもできる。いずれにしても、それまで大人から慣習的に与えられた「生き物を殺してはいけない」という価値観の捉え直しがこの時期に起こると言えそうである。池川(1999)は看護

職としての経験の中から「人の死生観の転換とか、変容は、啓蒙や教示によって生み出されるものではないと考える」と述べている。殺生行動にかかわる認識の発達について考えてみると、子どもは啓蒙や教示によって作られた認識構造を、一旦打ちこわし、自分自身の体験にもとづいた再編の作業を思春期から青年期に行うのではないと思われる。そうであるとすれば、思春期にいたるまでの子ども時代に体験したさまざまな「いのち」や「死」にかかわる幅広い体験の重要性が一層明確になる。

筆者らの質問紙法による研究（三浦ほか 2006）でも、殺生行動に影響するものは現在の「価値観」よりも「子ども時代の体験」らしいという結論を得ているが、「いのちに関わる意識」の変容は、啓蒙や教示による、表面的な価値観の変容よりも「子ども時代の体験」が深いところで関わっているのではないかという考え方を支持するものであろう。

また、大学生と教員の間での「嗜虐的殺生」における大幅な数値の減少は、さまざまな経験と心理的発達の過程を通して、愛情を寄せている動物の命に限らず、あらゆる生き物の命を嗜虐的に奪うことへの抵抗感が獲得された結果と説明できる。嗜虐的な殺生に関する項目で教員の平均値が下がるのは、小学生とは異なる、より主体的な認識過程のもたらす結果ではないかと思われる。

他の3因子の数値の変化とあわせて解釈すると、小学生ではまだ殺生を目的によって明確にわけてとらえるということができないが、中学生になると殺生を目的によって分けて考えるようになってくる。大学生、教員では、目的によって殺生できるとする項目とできないとする項目が明確に分かれる傾向があり、発達に伴って再構成された殺生への認識構造においては、やむをえない殺生と、するべきではない殺生というような意識の分化が進むのではないかと考えられる。

#### 引用・参考文献

古田晴彦 2002 『生と死の教育』の実践 清水書院  
長谷川千穂・三浦香苗・石井正子 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験 4—具体的殺生行動に対する意識の分析—日本教育心理学会 第46回総会発表論文集

- p. 350  
鳩貝太郎・中川美穂子 2003 「学校飼育動物と生命尊重の指導」（教職研修総合特集）読本シリーズ No. 157 教育開発研究所  
池川清子 1999 「二人称の死—いまなぜ医療に二人称の視点が求められているのか—」臨床死生学 4号 日本臨床死生学会 pp. 29-33  
石井正子・三浦香苗・鈴木陽介 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験 3—生活体験・価値観尺度の再検討と殺生行動との関連—日本教育心理学会 第46回総会発表論文集 p. 349  
石井正子・三浦香苗・田中千穂 2006 「いのち」に関わる意識と生活体験 7—小・中学生における、殺生行動に関する意識の分析—日本教育心理学会 第48回総会発表論文集 p. 718  
ジャンケレヴィッチ著 仲沢紀雄訳 1978 「死」 みすず書房  
ジャン・ピアジェ著 滝沢武久訳 1968 「思考の心理学：発達心理学の6研究」 みすず書房  
金森俊朗・村井淳志 1996 「性の授業 死の授業」教育資料出版会  
黒田恭史 2003 「豚のPちゃんと32人の小学生 命の授業 900日」 ミネルヴァ書房  
三浦香苗・長澤陽平・石井正子 2004 大学生向け殺生行動尺度の作成の試み—子ども時代の生活体験の効果の分析を通して—学苑 761号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 27-40  
三浦香苗・石井正子・長谷川千穂 2005 大学生の「具体的殺生行動」に対する認識構造の分析—「殺生行動」に対する賛否判断理由の水準分け—学苑 772号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 19-39  
三浦香苗・石井正子・田中千穂 2006 学生・教員の殺生行動に関する認識構造を規定する要因—生活体験・価値観・殺生可能性は殺生への態度に影響を与えるか—学苑 784号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 33-40  
村井淳志 2002 『『ニワトリを育てて食べる授業』の是非を問う』「世界」2002年5月号 pp. 217-224 岩波書店  
村井淳志・坂下ひろこ・佐藤真紀 2004 「いのちって何だろう」 コモンズ  
中川美穂子 2004 「学齢による飼育教育のあり方」学校運営研究 2004年6月号表紙3-4 明治図書  
NHK「こども」プロジェクト 2003 「4年1組命の授業 金森学級の35人」 日本放送出版協会  
大瀬敏昭 2004 「輝け！命の授業」小学館  
得丸定子 2005 「家族の死に直面したとき」 児童心理 2005年2月号臨時増刊 No. 819 p. 118-122 金子書房  
鳥山敏子 1985 「いのちに触れる」 太郎次郎社

(いしい まさこ 初等教育学科)

(みうら かなえ 心理学科)